

ヨハネの福音書講解 11章1～44節「ベタニヤの奇蹟」

今日の内容は、病気で死んだラザロが、その四日目にイエシュアによって生き返るという奇蹟のお話です。福音書を読む上で忘れてはならないのは、イエシュアの言動、業、そして出来事はすべて神がこれから成そうとしておられるご計画を指し示す「型」であり「しるし」だということです。ですから予期せぬ災難に見舞われた人々のために、イエシュアがやって来て、まるで漫画のヒーローのように問題を解決して「ああ主はずばらしい！ハレルヤ」という類のお話ではないということをも頭をしっかりに入れておいてください。ではまず全体の流れを把握しましょう。

11:1 さて、ある人が病気にかかっていた。ラザロといって、マリヤとその姉妹マルタとの村の出で、ベタニヤの人であった。

まず、今日の舞台はベタニヤという村です。ヘブル語で「いちじくの家(村)」という意味です。



11:2 このマリヤは、主に香油を塗り、髪の毛でその足をぬぐったマリヤであって、彼女の兄弟ラザロが病んでいたのである。

このマリヤを説明する記述は、後の12章での出来事です。

11:3 そこで姉妹たちは、イエスのところに使いを送って、言った。「主よ。ご覧ください。あなたが愛しておられる者が病気です。」

11:4 イエスはこれを聞いて、言われた。「この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。神の子がそれによって栄光を受けるためです。」

11:5 イエスはマルタとその姉妹とラザロとを愛しておられた。

11:6 そのようなわけで、イエスは、ラザロが病んでいることを聞かれたときも、そのおられた所になお二日とどまられた。

ラザロが病気で死にかかっていた。イエシュアはラザロ、マルタ、そしてマリヤを愛しておられました。しかしイエシュアは行かないのです。これは彼の公生涯において異例中の異例です。かつてその場に行かず、お言葉だけで癒されたこともありましたが、それさえもなさいませんでした。

11:7 その後、イエスは、「もう一度ユダヤに行こう」と弟子たちに言われた。

11:8 弟子たちはイエスに言った。「先生。たった今ユダヤ人たちが、あなたを石打ちにしようとしていたのに、またそこにおいでになるのですか。」

イエシュアが「宮きよめの祭り」の最中に、神殿のソロモンの廊という場所でユダヤ人たちと論じ、結果石打ちにされそうになる出来事が10章に記されています。

11:9 イエスは答えられた。「昼間は十二時間あるでしょう。だれでも、昼間歩けば、つまづくことはありません。」

ません。この世の光を見ているからです。

11:10 しかし、夜歩けばつまずきます。光がその人のうちにはないからです。」

11:11 イエスは、このように話され、それから、弟子たちに言われた。「わたしたちの友ラザロは眠っています。しかし、わたしは彼を眠りからさましに行くのです。」

11:12 そこで弟子たちはイエスに言った。「主よ。眠っているのなら、彼は助かるでしょう。」

11:13 しかし、イエスは、ラザロの死のことを言われたのである。だが、彼らは眠った状態のことを言われたものと思った。

イエシュアは重要なたとえを話されました。しかし弟子たちは理解できず、また質問することもなく「ラザロは眠っている」という言葉じりだけを受け取って勝手に解釈しています。この過ちは今日のクリスチャンたちにもよく見られます。

11:14 そこで、イエスはそのとき、はっきりと彼らに言われた。「ラザロは死んだのです。」

11:15 わたしは、あなたがたのため、すなわちあなたがたが信じるためには、わたしがその場に居合わせなかったことを喜んでます。さあ、彼のところへ行きましょう。」

今回のしるしは「あなたがた」すなわち弟子たちに対してのものです。

11:16 そこで、デドモと呼ばれるトマスが、弟子の仲間と言った。「私たちも行って、主といっしょに死のうではないか。」

今度は「死んだ」という言葉じりだけをつかんで勝手に理解しています。

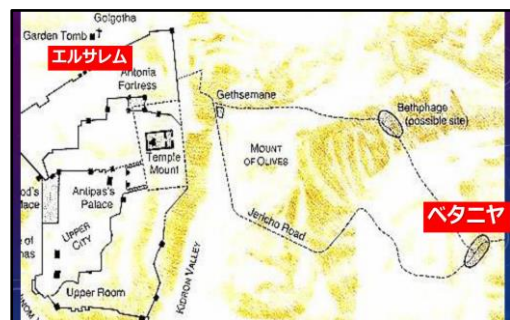
11:17 それで、イエスがおいでになってみると、ラザロは墓の中に入れて四日もたっていた。

死んで4日ではありません。葬儀も終わり、墓に入れて4日です。死因は不明ですが死んだからといって即墓地へ、ということはないでしょう。ましてやマルタとマリヤはイエシュアを待っていたのです。ということはイエシュアがラザロの病気の話を聞いた時にはもうすでに彼は死んでいたようです。

11:18 ベタニヤはエルサレムに近く、三キロメートルほど離れた所にあった。

11:19 大ぜいのユダヤ人がマルタとマリヤのところにきていた。その兄弟のことについて慰めるためであった。この3人の家族は、神にも人にも愛されていたようです。

11:20 マルタは、イエスが来られたと聞いて迎えに行った。マリヤは家ですわっていた。



ようやくイエシュアが到着しました。マルタは早速出迎えに行きます。ですがこれも注意してください。主導権は神、イエシュアです。まずマルタを引き寄せ、マリヤを家で座らせました。

11:21 マルタはイエスに向かって言った。「主よ。もしここにくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」

マルタがイエシュアに対してつぶやいています。つまり文句を言っているのです。しかしマルタはイエシュアを非難したり拒絶しているわけではありません。それほどに苦しかった、悲しかったということなのです。イエシュアに対する信仰がなくなったわけではないことが次の言葉で解ります。

11:22 今でも私は知っております。あなたが神にお求めになることは何でも、神はあなたにお与えになります。」

11:23 イエスは彼女に言われた。「あなたの兄弟はよみがえります。」

11:24 マルタはイエスに言った。「私は、終わりの日のよみがえりの時に、彼がよみがえることを知っております。」

11:25 イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」

11:26 また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。このことを信じますか。」

11:27 彼女はイエスに言った。「はい。主よ。私は、あなたが世に来られる神の子キリストである、と信じております。」

すばらしい信仰告白です。そしてこの信仰を彼女に与えられたのは神です。しかし同時につぶやいているのも確かです。それだけイエシュアとマルタの関係は、親子のように親しかったということです。

11:28 こう言ってから、帰って行って、姉妹マリヤを呼び、「先生が見えています。あなたを呼んでおられます」とそっと言った。

そして次にマリヤをお呼びになります。マルタを先に来させ、マルタは「呼ばれる」という形で来させます。

11:29 マリヤはそれを聞くと、すぐ立ち上がって、イエスのところに行った。

11:30 さてイエスは、まだ村に入らないで、マルタが出迎えた場所におられた。

わざと遅れて来たうえに、更に村の入り口で立ち止まっておられました。普通ならありえません。このように、人間の常識ではちょっと理解できない言動の中に、神の「しるし」が隠されています。

11:31 マリヤとともに家にいて、彼女を慰めていたユダヤ人たちは、マリヤが急いで立ち上がって出て行くのを見て、マリヤが墓に泣きに行くのだろうと思い、彼女について行った。

このマリヤとともにいたユダヤ人たちのことを覚えておいてください。彼らも重要な登場人物です。

11:32 マリヤは、イエスのおられた所に来て、お目にかかる、その足もとにひれ伏して言った。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」

マルタ(αἰμαρτα)...	マル(ἄλ) 苦い、苦しい	ター(ταρ) 部屋
マリヤ(μαρια)...	マル(ἄλ) 苦い、苦しい	ヤーム(ἁμ) 海

マルタと全く同じことを言っています。しかし彼女のような信仰告白はありません。それほどまでにマリヤの悲しみは大きかった、深かったのです。ここでこのマルタとマリヤという名前に込められた意味をヘブル語で見たいと思います。

二人ともに「苦しみ」を表す「マル(מר)」という言葉が使われています。しかしマルタが苦しみの「部屋、玄関」であるのに対し、マリヤは「海、大河」です。マリヤの苦しみはマルタよりもずっと大きかったのかも知れません。

11:33 そこでイエスは、彼女が泣き、彼女といっしょに来たユダヤ人たちも泣いているのをご覧になると、
霊の憤りを覚え、心の動揺を感じて、

11:34 言われた。「彼をどこに置きましたか。」彼らはイエスに言った。「主よ。来てご覧ください。」
全知全能の神に知らないことはありません。でもイエシュアはあえて尋ねています。神は「来てください」と呼び求める者のところに来られるのです。

11:35 イエスは涙を流された。

11:36 そこで、ユダヤ人たちは言った。「ご覧なさい。主はどんなに彼を愛しておられたことか。」

11:37 しかし、「盲人の目をあけたこの方が、あの人を死なせないでおくことはできなかったのか」と言う者もいた。

11:38 そこでイエスは、またも心のうちに憤りを覚えながら、墓に来られた。墓はほら穴であって、石がそこに立てかけてあった。

イエシュアが憤っておられます。33節と38節で二回もですからかなり激しい感じですよ。

11:39 イエスは言われた。「その石を取りのけなさい。」死んだ人の姉妹マルタは言った。「主よ。もう臭くなっておりましょう。四日になりますから。」

11:40 イエスは彼女に言われた。「もしあなたが信じるなら、あなたは神の栄光を見る、とわたしは言ったではありませんか。」

イエシュアがマルタを戒めておられます。マルタの信仰がまだ口先だけだったことが解ります。

11:41 そこで、彼らは石を取りのけた。イエスは目を上げて、言われた。「父よ。わたしの願いを聞いてくださったことを感謝いたします。

11:42 わたしは、あなたがいつもわたしの願いを聞いてくださることを知っておりました。しかしわたしは、回りにいる群衆のために、この人々が、あなたがわたしをお遣わしになったことを信じるようになるために、こう申したのです。」

これは先ほどの22節でマルタが告白した内容と重なってます。神は私たちの言葉に、祈りに答えてくださる方です。そしてその上でご自身の業をあらわされます。

そして前回もお伝えしましたが「あなた(御父)がわたし(御子)を遣わされた」という表現は、御父のご計画を御子が成し遂げるという意味です。

11:43 そして、イエスはそう言われると、大声で叫ばれた。「ラザロよ。出て来なさい。」

11:44 すると、死んでいた人が、手と足を長い布で巻かれたままで出て来た。彼の顔は布切れで包まれていた。イエスは彼らに言われた。「ほどいてやって、帰らせなさい。」

11:45 そこでマリヤのところに来ていて、イエスがなされたことを見た多くのユダヤ人が、イエスを信じた。

これは死者の復活という話ではありません。復活とは、死んだ人の霊が朽ちない身体に入り、永遠に生きることを指します。ラザロは確かに死にました。そして神によって生き返りました。しかしラザロの霊が再び入った肉体は、新しい朽ちない身体ではなく以前と同じものでした。ですからこれは復活のしるしではありません。以前の肉体である以上、この後遅かれ早かれ彼はまた死んだはずで、またイエシュアの十字架と復活の型でもありません。イエシュアが復活するのは三日目です。数が合いません。では一体この出来事は何のしるしなのでしょう。

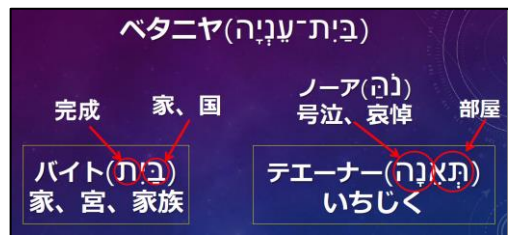
何度も申し上げますが、イエシュアの言動と業、そして起こる出来事はすべて神のご計画を指し示すものです。それが「御国の福音」なのです。この視点で読むならば、先ほどこの話を進めている中で、いくつか疑問に感じた点も、この奇蹟の全体的な意味も浮かび上がってきます。

いくつかのポイントに疑問を投げかける形で、このしるしの意味を解いてみましょう。

- ▼ベタニヤ(11:1)
- ▼昼と夜のたとえ(11:9~11)
- ▼マルタとマリヤ
- ▼村に入らなかったイエシュア(11:30)
- ▼四日目(11:17)
- ▼ラザロ
- ▼イエシュアの涙(11:35)
- ▼イエシュアの憤り(11:33、38)

▼ベタニヤ(בֵּית עַנְיָ)

なぜベタニヤなのでしょう？偶然たまたまではありません。ベタニヤとは「いちじくの家」という意味だと申しました。バイト(בֵּית)「家」とテエナー(תְּאֵנָה)「いちじく」を合わせた言葉です。バイトは「家、宮、家族」を表します。この最初の一字ベート(ב)だけでも「家、国、国民」を表します。それに神の手、力を意味するヨッド(י)、そして完成を表すターヴ(ת)がついていますので神の家、神の国のご計画の完成することを表します。



次にテエナー、つまりいちじくですが、これはヘブル語で見ますと二つの言葉が合わさったものであることが解ります。先ほどマルタでも見られた「部屋」を意味するター(תְּאֵנָה)、そして「号泣、哀悼」を表すノーア(נֹא)、「合わせると「嘆きの涙の部屋」となります。またいちじくはイスラエルの代表的な果物です。日本人がスイカの食べられる時期を知っているようにユダヤ人ならだれでもこの実のなる時期を知っています。過ぎ越しの祭がある4月から仮庵の祭の10月までの7か月間、いちじくは何度も収穫され食べることができます。この7か月の「7」という数字もまた神のご計画の完成を表します。つまりこのベタニヤで行われたしるしは、「嘆きを経て神の国は完成する」という意味を持ち、終末的視点で読むならば、嘆きは大患難時代、神の家は千年王国を指すと思われる。

▼昼と夜のたとえ

このたとえの意味を知るヒントが、同じヨハネの9章4～5節でこれに似たたとえで語られています。

ヨハネ9:4 わたしたちは、わたしを遣わした方のわざを、昼の間に行わなければなりません。だれも働くことのできない夜が来ます。

9:5 わたしが世にいる間、わたしは世の光です。」

「昼の間」とはわたしたち、つまりイエシュアと弟子たちが働く時であることが解ります。当然教会がここに当てはまります。しかしその教会が働けなくなってしまう時が来ると預言されています。しかしイエシュアの弟子たちによって教会が誕生してから今日に至るまで、その働きを止めることができた力は存在しません。どんな武力も権力も、サタンでさえも、どんな迫害にも攻撃にも教会は耐え、縮小するどころか逆に増え広がり続けてきました。教会は存在する限り「働き」続けます。ですからその働きができなくなるということは、教会がこの地上からなくなる以外にありえません。イエシュアの空中再臨、教会の空中携拳がその理由と考えられます。教会が携拳されてしまえばもはや誰も福音を語る者はいません。それが「だれも働くことのできない夜」、つまり「働く者がいない夜」です。大患難時代と呼ばれる反キリストの支配の時がこれに当てはまると考えられます。

空中携拳、大患難時代、と語られて次の5節「わたしが世にいる間」が12弟子たちのいる時代や今のこの時代を指すわけがありません。これはメシア王国、千年王国を指す言葉です。短い話ですが神のご計画が凝縮された「からし種」のようなたとえです。

では本題の9章4～5節を見てみましょう。「だれもつまずかない昼」とはいつのことでしょうか。だれもがこの世の光を見ているとも語られています。イエシュアがご自身を指して「世の光」とされていますから、だれもがイエシュアを光として歩む時代ということになります。これは千年王国以外には考えられません。そして光のない「つまずきの夜」は当然大患難時代を指すことが解ります。

▼マルタとマリヤ（ともに家にいた者たち）

もう一度、この二人の名前の意味を見てみましょう。マル「苦い、苦しい」という言葉が二人に共通していることに意味があります。私が親だったら絶対こんな名前は付けませんが…出エジプト記の中にこのマルにまつわる一つの出来事があります。

マルタ(מַרְתָּא)...	マル(מַר) 苦い、苦しい	ター(תָּר) 部屋
マリヤ(מַרְיָא)...	マル(מַר) 苦い、苦しい	ヤーム(יָם) 海

出15:22 モーセはイスラエルを葦の海から旅立たせた。彼らはシュルの荒野へ出て行き、三日間、荒野を歩いた。彼らには水が見つからなかった。

15:23 彼らはマラにきたが、マラの水は苦くて飲むことができなかった。それで、そこはマラと呼ばれた。

15:24 民はモーセにつぶやいて、「私たちは何を飲んだらよいのですか」と言った。

15:25 モーセは主に叫んだ。すると、主は彼に一本の木を示されたので、モーセはそれを水に投げ入れた。

すると、水は甘くなった。その所で主は彼に、おきてと定めを授け、その所で彼を試みられた。

この箇所はモーセがエジプトからイスラエルの民を引き出して海を真っ二つに切り開いて渡るという驚くべき奇蹟を目の当たりにした直後の出来事です。三日間水を求めて荒野をさまよい歩き、そして一つの水場を見つけます。つまり「四日目」にマラに到着しました。しかしその水がマル(מַר)、苦くて飲めないので人々

は神につぶやくのです。なんとなく今日の箇所と重なってきませんか？マルタもマリヤも、そしてともにいた人々も彼女たちの悲しみを共有し、マル(7)すなわち苦しみました。そして「盲人さえも癒せる方がなぜラザロを救えなかったのか」とイエシュアに対してつぶやきました。そしてそのつぶやいたマルタ、マリヤと人々に対してイエシュアはラザロを生き返らせるというしるしをもって、神の力だけではなく神のご計画を表されます。つまりこのマルタとマリヤ、そしてマリヤとともにいた者たち、これはイエシュアがメシアであることを啓示された、つまりイエシュアを信じたイスラエル人と、それに接ぎ木された者たち、すなわち私たち教会を指していると考えられます。

▼村に入らなかったイエシュア

やっとベタニヤに来られたのに、イエシュアは村に入ろうとしませんでした。むしろマルタを引き寄せ、更にマリヤとまた彼女とともにいた者たちを呼び寄せられました。イエシュアのこの不可解な行動は何を意味しているのでしょうか。

Iテサ4:16 主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、

4:17 次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。

これは空中携挙、つまりイエシュアの空中再臨を表しています。大患難時代の終わりにはイエシュアは地上再臨されますが、その前に空中再臨されます。つまりこの時には地上には降りられません。「村に入られなかった」イエシュアはこのことを示していました。つまり最初にイエシュアを出迎えに行ったマルタは「キリストにある死者」の型で、次に呼ばれたマリヤ、そして彼女とともにいた者たちが「生き残っている私たち」の「型」と考えられます。

▼四日目

ラザロは四日目に墓から出てきました。正確には三日経って四日目の昼ですから、四日目はまだ半分しか終わっていません。先ほど9節で「昼間は12時間あるでしょう」と言われたことを思い出してください。ユダヤの日付は日暮れから始まります。つまり四日目の夜が明けて今は昼、だから半分ですから三日半経ってラザロは墓から出て来たということになります。この「三日半」という言葉は反キリストによる大患難の7年の後半の3年半を意味していると考えられます。ラザロは三日半の間、死に渡された、死の手にゆだねられたのです。
ダニ7:25 彼は、いと高き方に逆らうことばを吐き、いと高き方の聖徒たちを滅ぼし尽くそうとする。彼は時と法則を変えようとし、聖徒たちは、ひと時とふた時と半時の間、彼の手にゆだねられる。

▼ラザロ

というわけでこの「ひと時とふた時と半時の間」彼、反キリストの手にゆだねられる聖徒、その型となるのがラザロなのです。

黙7:3 「私たちが神のしもべたちの額に印を押してしまうまで、地にも海にも木にも害を与えてはいけない。」

7:4 それから私が、印を押された人々の数を聞くと、イスラエルの子孫のあらゆる部族の者が印を押されていて、十四万四千人であった。

大患難を生き残る者たちは、反キリストに屈しなかった「残された者たち」であり神に忠実な者たちです。ち

なみに「ラザロ」という読み方はギリシャ語的発音からきているのですが、ヘブル的発音だと「エルアザル(רֵאָזָר)」と読みます。「神(אל)は助け(רָצַץ)」という意味で、エルアザルは大祭司アロンの後を継いだ忠実な大祭司の名です。



またサムエル I の7章でペリシテ人に奪われた契約の箱が牛に引かれて帰って来て、キルヤテ・エアリムに安置される話がありま

すが、そこで箱を守る番人として聖別される人物がいます。その名前もまたエルアザルでした。他にもイザクとリベカを結び合わせたアブラハムの忠実なしもべ「エリエゼル(רֵאָזָר)」も類語として挙げられます。まさに大患難の死の苦しみの中から、神によって助け出される聖徒たちの型、それがこのラザロ、いやエルアザルだったのです。

▼イエシュアの涙

イエシュアが涙を流される理由はただ一つです。それは大患難時代にエルサレムに起こることについてです。
ルカ 19:41 エルサレムに近くなったところ、都を見られたイエスは、その都のために泣いて、

19:42 言われた。「おまえも、もし、この日のうちに、平和のことを知っていたのなら。しかし今は、そのことがおまえの目から隠されている。

19:43 やがておまえの敵が、おまえに対して壘を築き、回りを取り巻き、四方から攻め寄せ、

19:44 そしておまえとその中の子どもたちを地にたたきつけ、おまえの中で、一つの石もほかの石の上に積まれたままでは残されない日が、やって来る。それはおまえが、神の訪れの時を知らなかったからだ。」

イエシュアはラザロのために泣いたのではありませんでした。メシアを拒んだために大患難を通らされるエルサレムとユダヤ人たちを思って涙を流されたのでした。

▼イエシュアの憤り

33節と38節でイエシュアは二度憤られています。その憤りが激しいものであることが解ります。これは決して人々に対して向けられたものではありません。敵に対してです。

I コリ15:24 それから終わりが来ます。そのとき、キリストはあらゆる支配と、あらゆる権威、権力を滅ぼし、国を父なる神にお渡しになります。

15:25 キリストの支配は、すべての敵をその足の下に置くまで、と定められているからです。

15:26 最後の敵である死も滅ぼされます。

15:27 「彼は万物をその足の下に従わせた」からです。

イエシュアの憤り、怒りは最後の敵である「死」に向けられたものでした。ラザロは文字通り死んでいました。死という敵に奪われていたのです。その死を打ち砕いて、見事にラザロを取り返したのです。めちゃくちゃかっこいいです！まさに正義の味方、ヒーローです。しかもこれは王権を御父に渡されますので、千年王国を経た「新天新地」の預言です。

このように、このベタニヤのラザロの奇蹟は、イエシュアの「空中再臨および空中携拳」と「大患難時代」、そして「千年王国を経た新天新地」を表すしるしであると考えられます。